

※平成二十七年八月一日発行「石浦町内だより」より

## 戦争体験話

三―四班 下山 惣一郎

戦況が厳しくなった昭和二十年三月私の徴兵検査があり、背丈がないので第一乙だった。甲種合格でないので安心していただけが突然召集令状が来て、四月二十日に三重県志郡久居陸軍東海五十九部隊に入隊となる。各地寄せ集めの新設部隊は誰も知らない者ばかりで寂しいが頑張るぞと心に決める。入隊して三日位静かだった兵舎も初年兵が気合を入れられてパンパンとスリッパで殴られる毎日。軍隊は生き地獄。一期検閲が終るまで毎日厳しい訓練を三か月間受けなければならず、天竜川河川地内で完全装備で背囊の中には石を入れ、銃を手に匍匐前進の繰り返し。もう汗と砂でぐたぐた。その上、食事の量も少なく腹が減ってこの先、どうなるか言葉では云えない位辛い訓練だった。戦況が厳しくなり我が中隊に移動命令が出て浜松の航空隊の近くの山を手掘りで銃眼<sup>注18</sup>口作りの作業となった。道具が不足しているので、ある者は二泊三日の外泊許可証を出す

云われ、久しぶりに我が家に帰り、まず飯を腹一杯食べた。余り食べすぎて夜、腹が痛くなり下痢。昔の便所は外にあったので真っ暗な中、いきなり足を踏み外し「ドボン」。これだけは、今でも忘れられない。翌日中隊に帰隊、明日から山の掘削作業で少し気楽になったが、藁草履で、靴は決戦の時の為に使用禁止。山の掘削作業は私に向く作業だった。近くの農家の方が応援に来て下され、飯も余分に持って来て頂き、あの時の飯のうまかった事は忘れられない。八月に入り敗戦となるのではないかと噂が出始め、八月十五日終戦となる。気が抜けた。もう軍隊は上下余りなく、静かに銃器返納、残務整理等に追われ、九月除隊。気も抜け、注19雑のうに米と金を少し貰い汽車に乗る。気もゆるみ、疲れの為、いつの間にか寝てしまい、岐阜駅で盗難された事に気づく。岐阜駅は戦災で焼け落ちて何処からでも乗れる状態で仕方なく無銭で高山行に乗る。高山に着いたが切符がないので事情を話して出る。やっと我が家に着きやれやれ。七十年前の事で分かってもらえるかな？もう二度とこんな戦争は嫌だ。平和な日本がいつまでも続く事を祈るのみ。

## 戦争前後を憶う

九―三班 上牧 右田子

敗戦の年の春頃から東海地方にも空爆が相次ぎ、名古屋、岐阜、富山も焼野原となりました。次は高山が危ないとか町の内では家屋疎開<sup>注20</sup>とかで町筋の家も取り壊されてゆき、空襲警報が出ると母や兄弟で東山まで逃げていましたが、父が疎開小屋を作ると云い、松ノ木の方に大家族なので二階建を建てましたがすぐ終戦。後日大阪から疎開して来ていた人に譲ってあげた様です。

終戦の日は恰度祖母の祥月命日でお寺の坊様がいらしていて、佛具など供出された佛壇での読経のあと一緒にラジオの玉音放送<sup>注21</sup>を聞きました。雑音がひどく辛うじて「ポツダム宣言受託」とか「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」などの文言が聞き取れました。

「日本は敗けたんやな」ぽつりと言って帰られた住持さんの後姿が思い出されます。

戦闘には参加しなくても、戦災には遭わなくても、国民全体にのしかかってくる敗戦という現実。惨めな日々。とりわけ食料不足は大変なものでした。

育ち盛りの子供の多いわが家では食料の確保に父も母も奔走していました。母方の遠い縁戚を頼り米と換えられるものは何とでも交換しました。衣類は勿論、祖父の自慢の千本格子の障子まで農家に運ばれてゆきました。

空襲をおそれ電燈に黒いカバーをかけ、暗い部屋で大根や芋の入った雑炊で命を継いできた事など今の若い人には想像も出来ないでしょう。スーパーやコンビニに行けば何でも手に入ります。でも現在の食料自給率は三十九パーセントを切るとか、世界の情勢の変化で輸入がストップされたらどうなることでしょうか。決して他人事でない現実が目の前にあるのです。

戦争時の体験は絶対風化させてはならないと最近の右寄りの政治の行方を危惧しています。

## 空白の二学期

六一二班 福川 毬子

あの日は大陸特有の紺碧の夏空だった。大人達はすすり泣いて居た。七十年前の八月十五日、六年生の私はもう登校出来ないであろうと直感した。「北京」の日本総領事館官舎で敗戦を迎えたが、父が領事館より帰宅と同時に外出禁止令があり、十数人居た現地私の私人達の姿が消え、私達は一層得体の知れぬ恐怖に包まれた。そして深夜軍靴の音と共にソ連兵が進入、突き出す銃剣隊列の間をリュック一つの日本人家族は黙々と移動させられた。これ迄何の憂いもなく豊かに過した官舎を後にした。元私人とその家族等が泣きながら私達を呼び続け別れを惜しんでいた。辛かった。「天津」の旧日本料理旅館で百人程が集結、四か月間の不自由な生活が続いた。中国人の暴動、日本人拉致事件が頻発したので外出も不可能だった。学童等は屋内でそれなりに遊びを工夫し元気であった。進歩的な父の奨めで私は或青年より英語を学んだ。後になって読んだ「アンネの日記」は処々で相通ずる場面があった様に思う。

引揚げの日がやっと決まったのは十二月だった。私が肺炎を発症し、高熱に苦しんでいるのを見て、母は二人大陸に残ると父に懇願したが父は許さなかった。塘沽の港から米軍の軍艦の船底にリュックと共にすし詰めに坐らせられ十日余りの航海がスタートした。荒れた冬の東シナ海を極度の揺れに大人達は苦しんで居た。又、乳幼児が毎日の様に死亡し、甲板より水葬される場面を見て私も涙が止まらなかった。

十二月二十日頃、辛い航海の果て夢にまで見た祖国、佐世保港に入港した時は大人も子供も甲板に立ちつくし朝日を浴びながら涙を流した事を昨日の様に思い返す。港の鮮やかな緑とたわわに実る美味しそうな蜜柑の風景。やはり祖国は美しいと心底痛感したものだ。

数日後検疫も終り、いよいよ引揚列車に乗ったが、ギューギュー詰めにつめ込まれ、子供達も背にリュックをつけて堪えた。九州横断、広島大阪の戦禍を眺めつつ郷里新潟へと数日かけて列車に揺られた。次第に雪景色にかわり心がはやる。そしてやっと大晦日の夕暮れ家族は雪の降りしきる駅に降り立った。

## ある戦争下の覚えがき

七―三班 谷口 永一

光陰矢の如し！といわれるように、戦後七十年の節目を迎えた。思えば私達小学校時代は、食糧難で運動場を開墾し甘藷<sup>注22</sup>の苗を植えたり、学校より農家の手伝いに行き、学業より国策優先の日々であった。

国民学校高等科二年（今の中二）の時に、学徒動員令により、生徒は軍需工場<sup>注23</sup>で働くことになり、学校から隊列を整えて、花岡町にあった「飛驒航空会社」に派遣され、まだ十五歳の少年であり、工場では雑役作業で汗を流した。

ある日先生より陸海軍少年兵募集の話があり、当時国防色一色、みんなで話し合い、私は海軍を志願し、昭和十九年秋に採用通知が届き、三重海軍航空隊に入隊した。

出発の朝、速入寺前で簡単な壮行会があり、町内会長飯山義氏よりの励ましの言葉を

少し覚えている。石浦の青年団・婦人会など町内の人達に送られ、駅では校長先生を始め同級生・動員先の工場のみなさんに見送られ高山を後にした。

海軍生活は午前五時の総員起しより午後九時の巡検まで、課業が詰っており、午前は座学・午後は体育が主で、三か月の基礎訓練を経て、岡崎基地に移った。時々気合を入れるとあって、全員殴られ、一度はバッターとあって棍棒で尻を叩かれたこともあった。

反面楽しいこともあり、たまに有名歌手の慰問団注24の来訪や、海軍軍楽隊の素晴らしい演奏会に痺れたこともあった。三か月の教育が済み、毎日曜日は個人外出も許された。

終戦は横須賀基地で迎え、軍港には、はるか沖に戦艦「長門」一隻のみで、他の艦艇は見えず、入江には多数の特殊潜航艇が並んでいた。

八月十五日終戦の日、雑音の多いラジオをうなだれて聞き、張りつめていた気持ちの遣り場がなかった。

九月の初め帰郷する時、東海道沿線の都市は殆ど罹災しており、高山線に乗り換え岐阜駅で下車したら、見渡す限り焼け野原で呆然とした。

それから戦後の苦しい生活が続き、陣屋前の広場は、バラック<sup>注25</sup>建の闇市で埋まり、  
又、農村部への食糧買い出し生活の日々であった。

終戦忌少年兵も老いにけり

## 幻で終わった太平洋の防波堤

昭和町一 洞口 義武

戦前のサイパン島を中心とするマリアナ諸島は我国の統治する常夏の島々で、農業と漁業が中心の平和な暮りでした。

戦争末期の昭和十九年米国はこの島の一つテニアン島を我国爆撃の中継点とすべく攻撃を開始。事前にこれを察知した我軍は、本土と満州にてソ連との国境警備に当たっていた相当数の兵と軍備を急遽この島々を本土防衛の防波堤とすべく送り込みました。

私の二兄は満州で軍務に従事していたが、昭和十九年早々より音信不通となりました。以後私は昭和五十年代に四回に渡って慰霊と遺骨収集に参加した折に同行された元兵士(兄の上官)にめぐり逢い、右満州から同一に行動され兄戦死を現認、己も重症と聞き、玉碎といわれる我軍ほぼ全滅の中で戦闘状況も戦死場所や月日を含めそのほとんどが不明のまま、二か月もしてから一括処理で戦死月日とマリアナ方面にての戦死と知らされたのでした。

慰靈渡島の折現地ガイドさんらと共に太平洋に向かって全員で「海ゆかば」を合唱し涙がとめどなく流れました。

尚三く四泊しての遺骨収集の状況や、収集したご遺骨の取扱い、又戦時現地住民だった鈴木一家は逃げつつ目前に迫って来た米軍に対し、当時六歳だった鈴木少年は父に首を切られて倒れ、あと母と妹を刺した父自決した模様。少年は米軍の手当てを受け快復し我国民間人に預けられました。島は占領され本土へ帰国成人したと元少年は語り、我々一同も鈴木さん一家自決の地に詣でました。もっと書きたい思いです。

## 遺稿 団長を偲んで

下島 寅三

昭和十四年、朝日村満州分村計画がはじまった。大字一之宿、清水幽溪寺住職、鈴木亨氏に団長の白羽の矢がたち、氏の決意によって当寺の檀家関係もあり、地元一之宿部落の人達によって団の構成がスムーズに進んだことも鈴木団長の人望のしからしむところであった。

十五年春には、茨城県にある内原満蒙開拓青年義勇軍訓練所に短期入所して、加藤完治先生の訓練を受けられたのである。仏門の世界から一転して、さぞ身にこたえたことであろう。

こうして昭和十五年四月二十日、鈴木団長は、先遣隊を率いて永住の地、東満州琿春県に到着した。琿春県地区への日本人開拓移民の入植はこれが初年度であり、岐阜県から郡上の高鷲と朝日、青森県から飯詰の三個団が入植した。四月二十一日を期し、待望の共同生活がはじまった。先ず起床と同時に、本部東側の先発隊によって設営された広

場に集合。団長訓示の第一声は、和合の精神に徹するということであつた。何事をやるにも、みんな仲良く「和」をもって話し合えば必ず達成できる。また、私共は他国からやって来ているのだから、原住民と融和でなければならぬと力説された。

団長の発声により弥栄を三唱して朝礼を終るのであるが、団長の音頭は内原訓練所で鍛えた「いやさか、いやーさか、いやーさかー」と天を突き上げるような弥栄で、国の発展を象徴する力の入つたものであつた。弥栄とは、万歳と同じ意味である。

入植当時は、言葉の壁に悩まされ、ソ連のスパイと間違えられそうになつた事もあり、一日一日が緊張の日々であつた。

入植二年目は、冷害と本部事務所の火災により、団長の精神的打撃は私共の想像を超えるもので、その対策に日夜協議を重ねた。副団長を伴い、県、省、及び満拓に対して要望の嘆願に、時には開拓総局までも出かけて、団員が動揺することなく営農や建設に従事できるように涙ぐましい努力をされた。

また、あらゆる機会に団員の精神訓練を行つて、開拓団の使命を認識せしめ、学校教育においても在満教務部を通じて、郷土出身教師の誘致などに努められた。その他、原住民と農地や水利の問題などで時々衝突が起きたけれども、団長が円満に解決され、常

に原住民との親睦に心がけられ、地区内住民から慕われておいでになった。

特に団長の心痛だったのは、十六年、十八年と二度に亘って起きた団地移転問題であった。十六年には軍部からの秘密指令にて、ソ連と朝鮮に接した作戦の要地であるとの理由で、また、十八年には琿春炭鉱のボーリング調査によって団地内に鉱脈が延びているとの理由であった。団員の動揺、今後の入植に及ぼす影響など、団長の悩みは続いたのである。団長は小柄だったけれど心は大きかった。且決意した以上は必ず目的を完遂する信頼の人であった。この問題も団長の強力な申し入れの結果、その熱情が認められて移転は中止になった。その後は、二年続きの豊作により団員の経済的状況も好転し、総てが完成の域に達しつつあった。

そんな矢先、二十年八月九日早朝、琿春県長からの警備電話による日ソ開戦のための避難命令を境に、王道楽土建設の夢は一瞬にして破られたのである。<sup>注26</sup>敗戦と同時に日本人は一切の自由を奪われ、かつて体験したことのない難民になってしまった。原住地へ帰ることを唯一の望みとして、百二十キロの道のりを野宿しながら十二日間もかかって、九月二十三日にようやく琿春に戻ったものの、我らの想像したような甘いものではなかった。琿春街の半壊に等しい旧警察官舎と東満ホテルは日本人難民収容所となり、

団員はそこに詰め込まれた。私は団長と棟続きの官舎に入る。開拓地入りの夢は消えたのである。

その頃は琿春保安維持会の支配下にあつて、外出や就労は禁止され、主穀注27(原高粱)のみ支給され、働ける者は各種使役を課せられた。琿春の収容所では、ソ連兵の強奪強姦が続き、十一月上旬からは悪性伝染病の発疹チフス注28再帰熱が発生し、疫労と栄養不良、日増しに厳しくなる寒さのため死者が続出した。

団の柱と頼る団長も病魔に侵され、医師の懸命の看護も及ばず、病魔は家族にも広がった。愛妻、愛児と枕を並べてうめく姿はまさに地獄であつた。亡くなる前日、紙と筆がほしいと仰せられ、

「最後まで 苦樂を共にせんと誓ひしに 今日あすとは思わざりしを」  
の辞世の句をもって、昭和二十年十一月二十四日、苦難の生涯を終えられた。

生前、団長は省公署、満拓公社、県公署等、はば広い信頼があり、琿春地区七十団の中心的な人物でもあつた。十一月二十六日に容ばかりの団葬をもち、田中副団長より「常に団員の和合に努められ、団の経営、発展に尽力された功績は、筆舌に表しがたきものあり」と感謝の言葉で団長の最期を称えた。

枯葉舞う　みたまの眠る　円城寺

　　琿春朝日開拓団回顧録『遠のく　荒野の空』（昭和五十七年）より、父の遺稿を割愛、  
改稿し、掲載させていただきました。

畑中　満子

## 巡洋艦阿賀野の最期 ※父三島盛喜の体験談

莊川遺族会 三島 則和

「寝るな、眠るな」

海に投げ出され、熱さと極度の疲れで朦朧としている私の耳元に微かに聞こえる渡辺兵長殿の声の拳骨で我に返った。昭和十九年二月、巡洋艦阿賀野は敵艦魚雷を二発くらいい、海の藻屑と消えた。そして、阿賀野の総員が海に投げ出された時のことである。

昭和十七年、私は十八歳で海軍に志願し広島大竹海兵団に入隊した。三か月の新兵教育のち戦艦武蔵で呉港を出港し、日本海軍基地トラック島に向かった。到着後すぐさま巡洋艦阿賀野に乗船し、眠る時間が僅か三時間程の厳しい実戦訓練を受ける毎日であった。

十八年十月、連合艦隊はトラック島に集結し南太平洋作戦に当たることになった。その内ブーゲンビル島沖の海戦に臨んだ。ラバウル港に入り、第一回目の空襲を受けた。他の巡洋艦が浸水する被害を受け、応援に行った。六名で一晩中手押しポンプを使い海

水を汲み上げる作業を行い、身も心も疲れ果てて朝を迎えた。明るくなって辺りを見渡すと、戦死者の肉片があちこちに飛び散っているのを見て次は自分の番が来るのではないかと戦慄が走ったのを今も覚えている。

その後、巡洋艦阿賀野に帰艦し、ラバウル港で第二回目の空襲を受けた。空が暗くなるほどの大空襲で、阿賀野も敵魚雷を受けスクリュー二本と舵を壊されてしまった。敵機が去るのを待ち、残りの二本のスクリューを操りながらトラック島に向かった。その時の私の配置は右舷深照灯管制機伝令として艦橋の下で見張りをする任だった。途中まとも敵潜水艦の魚雷をくらい、航行不能に陥った。被害は甚大で負傷者・戦死者も多数出て、艦上では負傷者の手当てと死者の棺を中甲板に並べ置くだけの慌ただしいものだった。

一昼夜経って巡洋艦長良と能代、注29駆逐艦二隻が救助に来てくれた。そして我が艦は巡洋艦長良に曳航され、夕方には何とかトラック島に入港できた。途中、戦死者の水葬を執り行った。遺体に錘の大砲弾を一発抱かせて小銃の合図と拳手の礼で海に入れるものだ。戦友との別れは辛く淋しいものであった。

同十九年二月、阿賀野は完全修理のため、注30駆逐艦一・駆潜艦一に守られ、夜中に内地

に向かってトラツク島を出港した。二日目の午後七時「全員配置につけ」の合図で私もいち早く見張りについていると四本の魚雷が真正面の私の方に向かって来た。もう駄目かと思っていると艦の下を潜っていった。ほっとする間もなく再び二本の魚雷が向かって来て激しい衝撃が艦を走った。火災と浸水で阿賀野の艦橋が覆さるくらい艦が傾いてきた。沈没の最悪の事態に備え、傾いた甲板を走り回って材木や板をかき集め筏を作りあげて指示を待った。突然艦長より「現在九時、総員退艦を命ず」の指示で皆が一斉に海に飛び込んだ。新兵の私は後から筏に乗ろうと待っていると、皆が我先に飛び乗ったため筏がばらばらになってしまい私には何一つ掴まるものが無かった。そこで水面すれすれの甲板に戻り角材と板を見つけ、ロープでしっかり結び合わせ海に飛び込んだ。海面に漂いながら一人になったり五、六十人の集団になったりしながら救助に当たっている駆逐艦を星明りに見つけ、それを目掛けて泳いでいくうちに随分多くの戦友が亡くなった。サメに襲われ、「やられた、頑張れ」と言い残して海に姿を消していく戦友を何の手助けもできなかつた。やがて、阿賀野は大きな火柱と大爆発音を残して太平洋にゆっくりと姿を消していった。それをただ啞然と見つめるしか出来なかつた。

一人で海に漂っていると渡辺分隊長殿が近づいて来て「三島大丈夫か、俺の持ってい

る浮きに掴まらないと沈んでしまうぞ。待っている」と言って持ってきて下さった物に二人で両脇に抱えながら浮いていた。遠くで軍歌を歌って励ましあう声が聞こえていたが、それも聞こえなくなり、また二人だけになった。

夜が明け救助船も見当たらず、日がだんだん高くなるにつれて頭が熱く、海水を何度もかけて凌いだ。しかし熱さと極度の疲れで意識も薄れ朦朧として、もうだめかと諦めかけている時、耳元で「寝るな、眠るな」と叫ぶ声にはっと我にかえると渡辺兵長殿でした。「おい三島、マスト注31が見えるぞ」の声にゆっくりと顔をあげてみると水平線に駆潜艇の十文字のマストが日に輝いて見えた。そしてロープで助け上げてもらい、一命を取り留めることができた。

顧みると、海に投げ出された時の渡辺兵長殿の「寝るな、眠るな」の声の拳骨に命を救われ、感謝の念しかありません。しかしこの戦いで一瞬にして失った多くの戦友、甲板での悲惨な光景や海でもがく戦友の姿を今もって思い出します。戦争は駄目だ。絶対にしてはならない。このような犠牲者を二度と出してはならないと強く感じる。

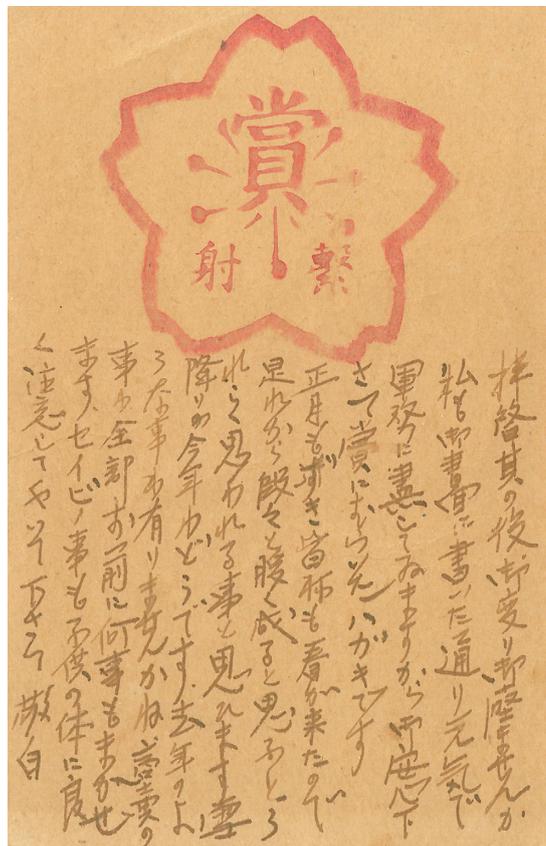
最後に、犠牲者に黙祷！

## 父のこと

西之一色町三 石橋 良子(旧姓大塚)

父、大塚末吉は、高山市名田町六丁目で靴屋を営んでおりました(現、国分寺通り、「丸明」付近)。昭和十八年、中支(中国)派遣第三〇七四部隊山田部隊へ出征。昭和十九年九月二十九日、中支にて戦病死。私は当時一歳半で、写真を見て「この人が私の父なのか」と思うだけで、何も覚えていません。父は三十三歳という若さで、妻、息子二人、娘(私)を残し、とても無念だっただろうと思います。母は私たち三人の子供を、大変な思いをしながら育ててくれましたが、晩年は、私や私の夫、孫たちと一緒に暮らし、いい人生だったと思っております。父が戦死しなかったら、私の人生も変わっていたかもしれないと思いましたが、私たちの為に、頑張ってくれた母、私たちのことを思いつつ、戦地で亡くなった父に、今は、感謝の気持ちでいっぱいです。

出征時の写真と戦地からのはがき



## 父の事 出兵後の事

山本 和子

父は、昭和九年 弟の四男を連れ中国へ渡りました。その時は、高山から汽車は全開通してなく、一部歩いて高山線に乗ったそうです。父の妹が嫁いだ先の伯父さんが、中国で成功されて居て、その人を頼っていったそうです。其の後、弟の三男も中国へ……。母は、昭和十一年、父方母方の親同士が信頼関係にあり、お宅の子なら心配ないと、親同士が決め、先に中国へ渡った父の元へ嫁いで行ったそうです。船を降りて荷物を持ってくれたのが父だったそうです。

其の頃、国策として、長男以外は中国の東北部(満州)へ行く事を奨励していたそうです。無理に行かされた訳ではないと思いますが、未知の世界への挑戦もあったと思います。子供三人を送り出した祖父母も、どんなにか心配だったかと思えます。

私の家族は、父母、妹(十一か月)、私(五歳)と四人。父の仕事は吏員<sup>注32</sup>。郵政局と書いてあります。

日ソ中立条約を結んでいたにも拘わらず、ソ連の一方的破棄で、国境が危険な状態になり、古兵は南方へ行き、満州の兵隊が手薄になり、現地召集がかかり、父も例にもれず、昭和二十年五月召集されました。

父を送り出す時、母は結婚式で着た花嫁衣装が虎の絵柄だったそうで、それを飾り父を送り出したそうです。虎は、千里行って千里帰る（元へ帰る）との意味がある様で、今の私には、母の思いが愛おしく思えます。

母とはうらはらに、私は父を送り出す時、皆さんが、バンザイと旗を振って下さったので、父さん 偉い人になった とハシャいで居た気がします。

父が出兵してどの位たったか覚えて居ませんが、母・妹・私は、郵政局の留守家族の方々と、朝鮮北部へ避難したそうです。母はリュックを背負い、妹を抱いていました。引率の男の人が、「じょっちゃん、頑張って」と声を掛けてくださった事は、はっきり覚えています。きつと歩くのがつらくて、ぐずっていたのだと思います。

避難した所は、小高い丘の様な、周りは田んぼがありましたので、田舎の学校だと思えます。避難者は、講堂でぎこ寝でした。食事は母達が当番制でおにぎりを作って配ったそうです。一日一個のおにぎりです。当番の時は、おこげが頂けたそ

うです。そのおこげがおいしくて、毎日おこげがほしいと思いました。

皆栄養不足で、特に母乳を飲ませているお母さん達は、母乳が出なくなり赤ちゃん達は皆亡くなったそうです。妹も肺炎にかかり亡くなりました。

その後、母もマラリヤと云う感染病にかかったそうですが、その間私はどうして居たのでしょうか？どなたかにお世話になっていたのですが、全然覚えが無いのです。

終戦になり暫くして、父の弟が居る奉天でお世話になり日本へ帰るのを待ちました。母はマラリヤの病気を持っていて、無事に日本へ帰れるかどうか分からなく、親日家の中国の方で、私をほしいと云って下さる、その方に預けた方が和子が幸せになると思っただそうです。悩んだそうです。昭和二十一年八月三十一日、コロ島から最後の引き揚げ船に乗る事が決まり、最後の決断で連れ帰ったと私が大人になってから話して呉れました。母の決断に感謝です。

母は時々おこるマラリヤの病気にも打ち勝ちながら、和裁の仕事をしながら気丈に私を守り育てて呉れました。

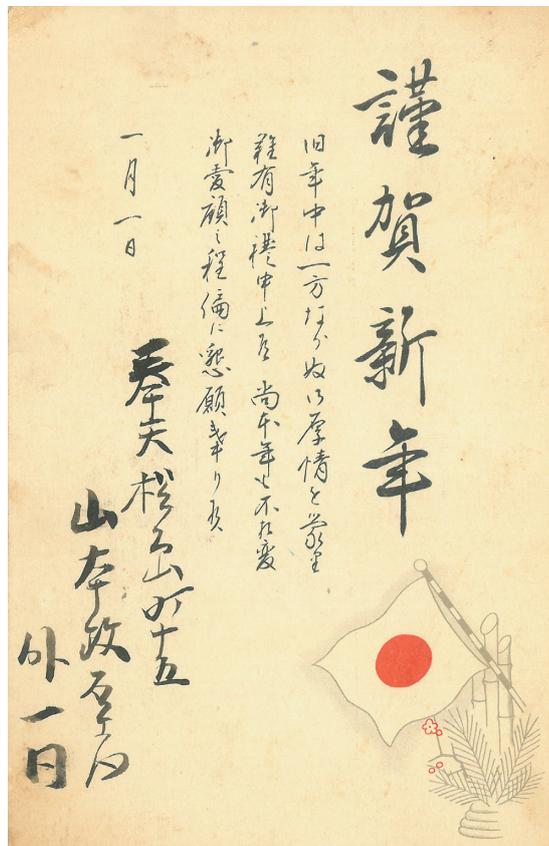
公報が入ったのは、昭和三十三年でした。十年余り便りが無い父の居た戦地が激戦だった事とあいまって、戦死と云う事になりました。

戦争が無く、父が居たら、私の人生どんなだったかと・・・時々思います。戦争が選べない人生の岐路だったんだと・・・。

父の居る人生を一寸のぞき見したくなります。平和な日本に居るから、こんな事思うのでしょね。

お父さん 御苦労様でした。そして ありがとうございます。靖らかに。

家族の写真と戦地からの年賀状



## 父と予科練

倉田 博之

亡父は昭和三年に生を受け、故郷の岐阜県中津川市で旧制中学を卒業すると同時に「海軍飛行予科練習生」に志願したと聞いています。世にいう「予科練」であり、少年航空兵の名のもとに、まだ十代の若者を特攻隊員として促成的に養成していたことが広く知られている軍事教育機関です。

私は、この時代のことを父が話すのをほとんど聞いたことがありません。話したくなかったのかもしれませんが、平和のために戦争の記憶をしっかりと次代に語り継ぐことの大切さを痛感する昨今、遺族会の皆様が取り組まれている戦時の記憶集編集の意義と重要性を強く感じるなかにおいて、わずかな情報をかき集めて、戦争体験者二世である息子から世間にお伝えすることを、父には許しを得たいと考えます。

父が、志願の理由を「腹が減ってどうしようもないので、軍隊へ行けば飯が食えると思った」と言っていたことは、亡くなった母から「もう半月も戦争が長引けば、お前た

ちの存在はなかった」という言葉とともに聞いたことがありますし、何の折りだったか九三式中間練習機（通称…赤とんぼ）の映像を見た時、「♪来るなら来てみる赤とんぼブンブン荒鷲ぶんと飛ぶぞ」と父が口ずさんだフレーズが耳に残っています。しかしながら、それさえ長い間思い出すことはなく、父と軍隊を結び付ける端緒は私の中にはありませんでした。「平和の語り継ぎ」活動をされていた故小峠良三さんが、「自分以外の特攻兵が、もう一人千島町にいる」と周りに話されていたことがこの手記のきっかけですが、それが自分の父のことであることさえ、知ってはいたのに最初は気づいていなかったほどです。

ただ、父が「赤とんぼ」でどの程度の飛行訓練をしていたかは定かではなく、姉は父から「もう練習機すら乏しくて、ほとんどが地上訓練や土木作業だった」と聞いていたそうです。そういえば父が予科練を指して、「どかれん（土方）」とか「よたれん（与太者）」などと自嘲的に表現したことは、かすかにではあります。が記憶に残っており、こういうことだったのかと今気がきます。そんな技術未習得状態であっても、次々に若者を死地に送り出す当時の国政に、心からの憤りを感じざるを得ません。

今回、この手記のご依頼をいただいたことを契機に、父の兄弟姉妹で唯一生存してい

る末弟の叔父に、その時代の父について何か知っていることがないか尋ねてみました。それにより、父が所属したのは滋賀県大津市にあった「滋賀海軍航空隊」であったということがわかりました。

また父が出征する際、地元の書道家でもあった旧制中学の恩師から餞として自書の短冊が贈られたそうですが、その短冊は出征前に父から末叔父に渡されて、今も彼が保管しているということも判明しました。

恩師からのせつかくの餞を、なぜ予科練に携行しなかったのかは今となっては知る由もありませんが、腹が膨れない物は必要ないと考えたのか、逆に、大切に考えたからこそ死にゆく自分でなく一番若い肉親に委ねたのか。おそらくはそのどちらかであったろうと推察するところではありますが、私としては、前者であってほしいと願っています。後者における十六歳の少年のその心情を、身内として推量するにはあまりに惆悵に忍びない思いを禁じえないからです。

父が出征してから終戦までの五か月間に、母親（祖母）が数度大津まで出かけたということも、末叔父から聞くことができました。家には飯が食えないことが志願の理由であったはずなのに、その食糧事情にあっても、祖母は毎回握り飯や五平餅を携えて面

会に赴いたそうです。子だくさんの貧困世帯でまだ幼かった末叔父は、その手土産をよほどうらやましく、垂涎の思いで眺めていたに違いありません。

その祖母の道中で、一度は乗車中の汽車に向けて米軍飛行機による機銃掃射<sup>注33</sup>に出遭ったことがあると、末叔父は祖母から聞いたそうです。資料によると、滋賀海軍航空隊は極秘基地であったとありますが、高山にも撒かれた米軍の爆撃予告ビラと同様のものが、大津の名入りで現地でも撒かれており、実際に大津空襲も行われたことから、日本の軍事施設などの情報は完全に米国に把握されていたと推察できます。祖母が遭った機銃掃射は単機であることから、そういった情報収集が主な目的と考えられますが、日本国土の内陸部にまで単機で偵察飛行を敢行し、あまつさえ民間に向けて攻撃を加える相手国に対し、その事象をやすやすと許し迎撃さえできない日本は、もうこの時点で戦いの終結を決断すべきだったはずだと悔やまれてなりません。

機銃掃射について、「兄より母が先に逝ってしまうところだった」と祖母の帰宅後に家族で語ったことを末叔父は思い出してくれましたが、その認識の隣にある「予科練は百パーセント生きて帰れないところ」という異常、その狂気を揺るぎない正常と捉えていた社会の在り方や、逆縁であっても愛する肉親を死地に捧げることこそが報国であり国

民の幸せだとする為政者の独善に絶対服従を余儀なくされた時代の、理不尽さや悲しみに対する自嘲と自戒が、電話の向こうの末叔父から滲み出ていたことを付記したいと思います。

わずかばかり終戦が遅れたばかりに夥しい数の命が奪われてしまったこと。ほんの少し時が微笑みかけてくれたことによって父が生き残れたこと。そのおかげで私や姉がこの世に生を受けることができ、子や孫の顔を見られている現在であること。そういった不確定要素に溢れた天の法理に思いを寄せる時、生きとし生ける者一人一人が、気が遠くなるほど低い確率の上に今存在していることを思い知らされます。

若い皆さま方へ、一つだけお伝えしておきたいと思うことがあります。

ご自分の命が、どんなにか奇蹟的な邂逅の積み重ねにより煌いているものなのか、そしてその人の形をした光がいくつも寄り集まって社会と繋がり、また回帰して自分を支えてくれているものなのか。

願わくは、どうかそのことをよく解され自他とも命脈を大切に慈しまれんことを、心から欲しているものです。

何気ない日常にあって、皆がそう思い行動し続けられ、世界の平和は自ずとやってく

る。そんなことを念じ、また固く信じて筆を擱かせていただきます。



入隊のころ



中央が本人(両隣は同期生)

## 追記

今回の寄稿のご依頼にあたり当時の写真を探していたところ、亡父のアルバムの中から予科練時代を中心とした一冊を見つけました。「攻撃精神」「股肱」<sup>注34</sup>「寸暇鍛錬」「挺身制海」<sup>注35</sup>「剛膽周密」などの添え書きに、心が痛みます。

また、恩師から父へ餞として贈られた短冊を末叔父が送ってくれました。恩師は「雲泉」という雅号で活躍されていた地元の書道家でもあったということです。「雲泉だるま」と呼ばれた筆絵のだるまがトレードマークで、それとともに「寝て牡丹 さむればもとの 胡蝶哉」という句がしたためられてありました。高山市文化財課のお手伝いもいただき調べたところ、江戸時代の俳人小西来山の句であることが判明しました。中国の戦国時代の思想家 莊子 による「胡蝶の夢」のなぞらえであるらしく、虚無の現生を表現しているように思われました。

## 戦争について

久々野町大西 中家 春農

私 今 八十二歳のおばあちゃんとなりました。戦後八十年と記念すべき年となりました。今は孫とひ孫に恵まれ感謝の日暮らしをさせて頂いております。が、振り返りますと色々思い出す事がありますが、その中に今、私の心に深く残っています事は、靖国神社へ小学生の時お参りした時の事です。遺児がお参りさせて頂く前の年は抽選で限られた人数しかお参りさせて頂けなかったのです。ところが私達六年生になって皆さん遺児を連れて行って下さいました。ただ東京へ行ける事に嬉しさいっぱいでした。さて、本殿へ参らせて頂き色々説明を聞いている中に、腹の底から涙がこみあげて来て、その時初めて父の事で涙した事を覚えています。

それから私も大人になり十九歳で嫁に行き、すると相手方でも一番上の兄さんが戦死されてみえ、私も満一歳でしたので、母は私を父の家に置き、じいちゃんばあちゃんと父の妹で育ててくれました。母は未だ若いので、私を父の家に置き実家へ戻られ、隣村

の朝日へ嫁がれ三人の子供に恵まれました。やはり嫁に行くのには子供連れでは．．．とじいちゃんばあちゃん相手方を思いやり、又母としては子供を置いていくもどかしさと何ともどちら心も苦しかったと思います。

又、戦争に行かれた父、大事な両親、妻、子供と別れて行く心のもどかしさ、お国の為とバンザイ迄して行かれる気持ち、涙を出したくてもこらえて我慢我慢。ほんとうに思い出しても胸が熱くなります。こうして今現在幸せに生活させて頂きます事に決して不平不満は許されない。決して一日として忘れてはならない。どうか一人一人気持ちを引きしめて、一步一步踏みしめて、戦争は二度としてはならない。

戦争に行かれた本人、親、兄弟、子供と、もう別れる気持ちとは、そこしれぬ悲しさだったと思います。

戦後八十年記念にあたり一筆とらせて頂きました。

有難度う御座いました。

## あずきな

田口 宝

「母は来ました 今日も来た」

カーラジオから、島津亜矢の声で「岸壁の母」が流れてきました。聞いているうちに、目頭がうるんできました。あれ！今まで、幾度となく聞いているのに、初めての感情でした。寄る年波で涙もろくなったのかな！

私は、昭和十九年五月生まれ、今八十歳です。戦争中の生まれですが、戦争について何も知りません。ただ、母の実家に行くと、仏間に母の弟だという二人の写真があります。そのうちの一人は、先日、両陛下が追悼に訪れた激戦地、硫黄島で戦死したと聞きました。父の弟三人は、幸い戦死することなく復員しましたが、戦後の混乱の中、生活に子育てに大変苦勞されてみえました。私の家は、兄弟が七人で、食糧難の連続でした。ふきのとう、わらび、ぜんまい、あずき<sup>注36</sup>な、すみさ、ノビル、熊いちご、グミ、クリ、クルミ・・・等々植物名で覚えているのは、食べることのできる物ばかりです。四六時

中食べるものを探しているようでした。特に母は、「あずきな」が大好きで、母のうれしそうな顔をみたくて、必死になってさがしたことが忘れられません。

戦後八十年、日本は他の国と武力で争うことなく、平和が続いています。これからも、続けていかなければなりません。一時期「戦争を知らない子供たち」という歌が流れました。今、戦争の悲惨さ、怖さ、空しさ、哀れさ等々が、うすれていくような気がしています。硫黄島を始め、沖縄、広島、長崎等々、大戦を象徴する地がたくさんあります。これらの事柄を後世に伝える必要があると思います。

戦争体験者は少なくなり、社会も大きく変化しています。「後生に伝える」ことが、平和持続の大きな要因だと思います。